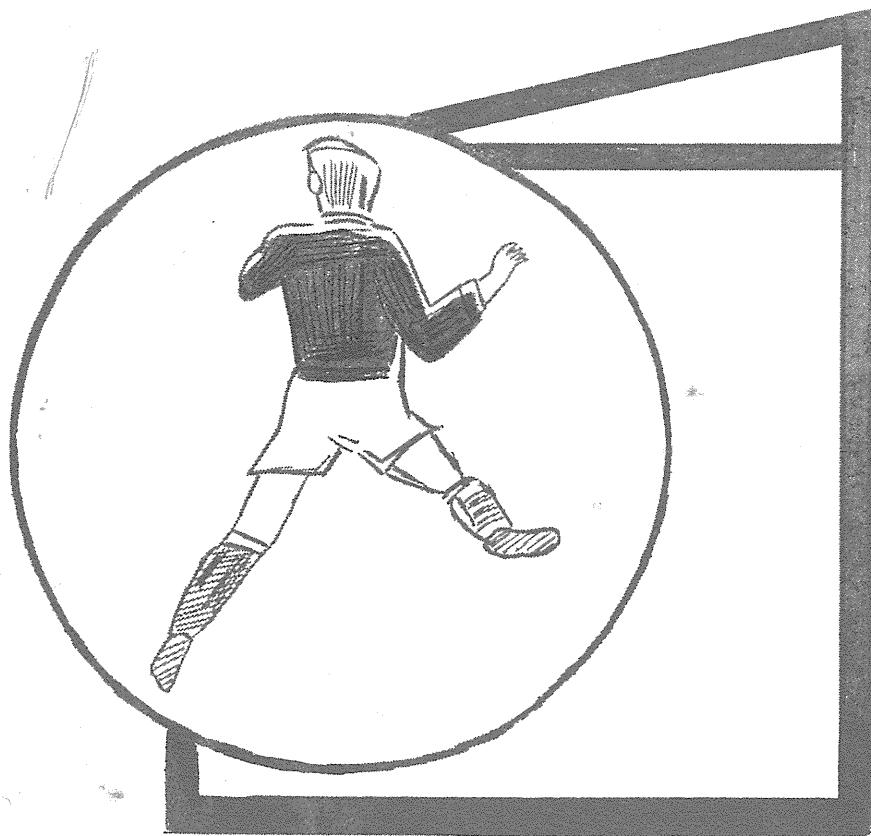


# ĐÁNH



7

榮光学園蹴球部

# Dash

私は、あなたがたにいう——勇気を持て！

私は、長く生きぬいてきました。  
いくたびも歴史がくり返すのを

この眼で見てします。

じつに多くの苦しい時代を経験しています、

しかし、私はいつもそれを克服して、前よりも、

強くなっていきました。

かつてあなたがたの祖先が勇敢であったように

あなたがたも、勇敢であれ！

前进せよ！

トマス・アルバ・エジソン

# 目 次

すばらしきサッカー部への道程	九期	田畠 哲也	1
—後進に担す—			
インターハイスクール予選			4
オリンピック選手育成合宿に参加して	十期	市村 俊一	8
= 特 集 1 =			
最近感じた事	九期	内山 正樹	14
新役員決まり			16
新人戦			17
練習試合	防 大		18
	緑ヶ丘		20
蹴球部今年の抱負	十期	市村 俊一	21
頑張れ十二期	十期	林 茂	23
山小屋でのゴシップ			25
中工はこうして入部した	渡辺 浩		26
	青戸 邦嗣		27
	村田 譲二		28
= 特 集 2 =			
部室で			29
中三の日誌より	十一期	田島 卓也	30
思い出すこと	九期	石原 博	33
登山と蹴球	十期	中前 嶺	34
ティーンエジー	十期	唯野 芙輝	36
スランプ	十期	大石 一之	37
D A S Hを回想す	七期	奥田 美穂	38
ゴシップ			40
昭和34年度戦成績	一高校一中学		44
編集後記	45	表 紙	大石 一之

# すばらしき

## サッカー部への道程

＝後進に担す＝ 九期 田畠 哲也

「私はたつた一年の過然に訪れるみのりの時代を期待していない。それより大豊作はなくとも来る年も来る年も確実な収穫を与えてくれる土地をつくりたい。もつと大地を深く掘り下げて、一九五四年度新学期にあたり私はもう一度静かに足下を見おろしたい。」この二ニュースフラッシュの文「我が部を語る」の一節である。

部が創立八年を迎えたし、七年前のそれよりも五年前のそれよりも三年前のそれよりもはるかな

中とはるかな深さを背ち更に強くなる大きく発展していくこうとする今日。今迄とは違った観点から部の進むべき道を見る必要はないだろうか。七年前の部はそのゴールポストは棒のぶっちかいであり、グランドすら満足できるものでなく、練習の半分はグラウンド整備にとられるというありさまで、まさに「草分けの時期」に専念した時期であり、「何とかして部を存在させること」という事に懸命になつた時期であつた。連戦連敗の我が部が頼りにしたもののは只部員の眞の熱であり、

気合であった。そして五年前の部は「部長が来れば試合に敗ける」というジンクスが「試合に勝つ」というジンクスに変りはじめた時期であり新しい息吹がたくましい息吹が新生サッカー部にみなぎり、栄光内部にも確とした基盤を持ち、又今日の繁栄を招いたすばらしい基盤を作りだした時期でもある。

又三年前の我が部は常に県下最強チームとして東日本に西宮に又栄光内に於ての比重はトミにその重

期とそしてそれらの蓄積された力を十二分に活用した現在に生きた最盛の期と。——そして今自分達に与えられた生き方は過去に生きる事であるのだろうか又現在のみに生きようとするのであろうか。そこで僕はサッカー部が昨年から今年にかけて新しい道、新しい生き方を開拓する必要にせまられ一種確固した基盤に更に一のすばらしき部を建設すべき時期が来たようのだ。先輩の汗の結晶であるこの部を胸に抱き角に当面しているのと思うのだ。

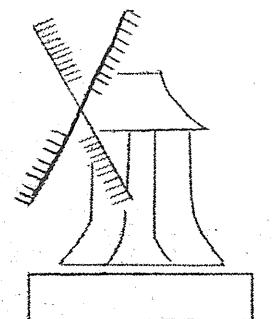
サッカー部が一度も勝つ事をできぬような部となつた時、部員が意氣と情熱を失つた時、そんな部に魅力はない。しかし又部員が特に高校部員が全ての力を勝つ事をそれのみに投入したならば又不安の念をおおい切れないだろう。サッカーチームは最近とみにその中と深さを持ちだした。もしその全てを捨てて勝利のみに突き進んだとした時、サッカー部は果して如何なるものに化するであろうか。もちろん勝利なくして部の幹は太くならないし、意気あふれる部員も生まれない。しかし对外的な物のみに全力を投なし、内部的充実を忘れた所に部の着実な発展はしない。

僕はここで言いたいと思う事は自分が「現実に生きる」事のみに終始してもらいたくはない事なのだ。完全な組織を持つた時それだけの

「未来のために生きる」にも又ある意味で「過去のため」にも君達の力を残してもらいたいのだ。勝利のために全てを犠牲にはしてもいい。勝利に全力を投入しながらかつその方面にも大きな意欲と情熱とを持ってのやんでもらいたいのだ。そして着実な努力の積み重ねが何時の日かすばらしき栄光サッカー部への結晶へとして必ずや結実するだろう。完全なまでの内部的充実をもちかつすばらしいばかりの勝利をあげうる日そんなサッカー部にならざるを得ない。それは着実な毎年毎年の努力のつみ重ねから部員一高校部員のみでなく高3から中3までのしつかりした自覚と風であるべきだろうか。

情熱が部を歎かせる時、必ずそんな完全な完成されたサッカーチームが生まれるのだ。それがあるいは今、一年実現されるか又十年後のサッカーチームに実現されるか或は百年後のサッカーチームに実現されるかそれは現在の部員の自覚と熱とによるのである。ともかくこの曲り角に当面した今日展開されるべき栄光サッカーチームは完全なる完成されるべき栄光サッカーチームに向つて着実な努力を続けるべきではないだろうか。或いは一日に効果はあがらないであろう。いやあがるはずもない。しかし素晴らしいサッカーチームを目指して一日一日をすごして行くことは毎年毎年の確実な収穫を約束しそして奥に何時かは豊かな大作の年を約束する。そしてそれが只一年の寒のない勝利を望むより

何年か後のすばらしきサッカーチームとえ内部的充実に力を尽した結果その勝利が八であったとしても全てを犠牲にして十の勝利を得るよりもその翌年の部がいや三年後のがその犠牲にあえぐよりも、なんによいことかしれないのだ。そういう面で昨年は新しい出発を遂げた。勿論創始につき物の全る面での大きな障害があつたのは事実でありその障害を全て乗り切つたとはどうしてもいえない。しかしここで頑しき後進に望むのだ。このすばらしいサッカーチームへの道程を一步々々着実に歩んでもらいたいのだ。必ずやすばらしい勝利に倒産するであろう。そしてこの



は昨年の部より少しでも進歩するであろう、そしてその次の年の部は今年の部より少しでも進歩するだろう。そしてこれがすばらしき勝利への最も手つとり早い方法であり道程なのだ。そして何時の日か完成された部がすばらしい部がついに実現した時は自分の自分達のわずかな努力がそうなったのだと思つて喜び合おうではないか。ではその日まで、

EVER ONWARD

# インターナショナルコンテスト

THE CONTEST  
FOR THE INTERNATIONAL  
HIGH SCHOOL

関東大会予選に小田原、慶應に敗れて以来、打倒小田原打倒鎌学を自指し、又「甲府へノ西宮ヘ」を相言葉に三ヶ月、いよいよインター・ハイスクールの予選がやつて来た。大会が近づくにつれて全員のファイトは燃え上り、関東大会当時より二倍も三倍もの気迫を感じられた。結局決勝で敗れはしたものの、準決勝小田原戦を頂点としたファイトの盛上りは素晴らしいものがあった。尚、今年でインターハイ五年連続決勝進出と云う輝しい記録を打立てた。

▽一回戦 十一月三日(火)

栄光	3
<u>1 1 1</u>	<u>0</u>
<u>1 1 1</u>	<u>1</u>
<u>1 0</u>	<u>1</u>
1 関東	

栄光のキックオフで試合開始。

1-1-0のリードを奪われたまゝ後半は始ったが、相変わらず関東のペースで五分にはし工にドリブルされGKまで抜かれ危なかつたが、拙いシュートに救われた。これを機にようやく栄光は調子を取り

しばらく中盤での互角の勝負が続いたが、次第に栄光のペースとなり、十分にはフリーのシュートが三本続いたが、いずれも惜しい所ゴールをそれてしまつた。中半を過ぎる頃から関東も盛り返し、巧みに栄光バックスをペースにはめかかり回し始めた。一方栄光の攻撃は関東のオフサイドトラップに引っかかり、ゴールに近寄れない始末で完全に試合は関東のペースになつた。そして二十五分ついに右コナーをし工に体でもちこまれ、0-10の均衡は破れた。

戻し、逆に押し気味に進め十五分

過ぎから敵のゴール前で釘づけを旨

取り、完全にゴール前に釘づけに

した。そして二十五分RH石原の口

ビンタをW菅沢へัดし、これが

ポストに当りはねかえるところを

決め同点に追いついた。更にもう

一点と懸命に攻めたが攻れされず

、延長戦へともつれ込んだ。

延長に入ると両軍負けてなるも  
のかと猛烈なファイトでぶつかり  
あい互格の試合を展開したが、前  
半終了前RH市村ドリブルで割って  
入り、一度敵に取られたボールを  
取り返しショートを決め逆点に成  
功した。後半に入ると、ファイト

の無くなつた関東に対し栄光は口  
ビンタ攻撃を仕かけ、五分石原の  
ロビンタをGKがはじくところをCF

大泉体で押しこみ、だめ押しの一  
点を奪い、更に十分CF大泉が二点目

点を加え難敵闘争を下した。

△二回戦 十一月八日(日)

栄光 9 — 4 — 0  
5 — 0 — 0 川崎

9—0と云うスコアー、及びゴ  
ールキック、川崎のコーナーキ  
ック、シュート率と言う数字を  
見ても分る様に、栄光のワンサイ  
ドゲームであつた。しかし、内審  
的に見れば無駄な動きが多く、川  
崎のペースに合わせて試合を運ん  
だ感じで、川崎が弱過ぎたと云う  
のが本当の所である。この調子で  
もう少し強い相手にぶつかつたら  
苦戦したに違ひない。

試合開始後しばらくの間はパス

が面白い様に通り、素晴らしい攻撃  
を見せ、三分早くも江佐藤が先取

△準々決勝 十一月十五日(日)  
栄光 4 — 3 — 1  
1 — 0 — 1 湘南

を加えた。しかしこの後は川崎が  
あまりにお粗末なのでたるんでし  
まい、腰を落ちつけてしまつた感  
じとなつた。それでも実力の差と  
言うのか攻められもせず、三十分  
三四分に大泉が二点をあげ四—0  
として前半を終つた。後半に入る  
とます／＼優勢となり、後半を通  
じてハーフラインを越えたのは一  
二度と言う有様だった。そして、  
七分佐藤十分田代十七分大泉ヒ着  
タ点を重ね、三十分佐藤三十四分  
大泉と更に二点を加え、計九点を  
挙げた。しかし今日の試合は十五  
点位入ても不思議では無い試合だ  
った。

キックオフ後五分間の攻撃は素

いたが得点なく後半に入った。栄

マ準決勝 十一月二一日(土)

対 小田原高校 一五時

キックオフ 栄光

栄光 3 — 2 — 0 — 1 小田原

ある大泉を欠いたにもかかわらず  
ヘントゲン撮影の結果鎖骨骨折

と判明し四人のFWで面白い様にパ  
スが通り、二分市村・四分山田・五分

光は負傷した大泉の後に太田を入れ  
た。後半の十分頃までは前半と同

じ互角の攻防が続いたが、除外に  
佐藤とまたたく間に三点を入れし

まつた。湘南はこの五分間どうし  
た事かいつものファイトがなく、こ

再び栄光のペースとなり絶好のチ  
ヤンスが三度四度と続いて訪れた

浮足立っていた。しかし三点を入れ  
られられかえって落着いたのか、こ

の後はファイトを出してぶつかっ  
て來たので、互格の勝負となつた  
。そして、十五分CFからFWにパス

石原トスに負け栄光のキックオフ  
を抜き、落着いて決め四点目を加  
えた。この後もかなりチャンス

が加わったが、ボールが軽かつたせ  
いかいすれも上げてしまい、四十  
一分のままでホイッスルとなつた。

「始めの十分に得点」を目指し  
てフォワード大いに動いたが、敵

が渡り、LWにショートを決めら  
れ本大会二点目の失点を許す。  
しかし栄光は二点のリードに気を

落す事なく更にファイトを出して  
しきし栄光は二点のリードに気を  
尚、この試合はレフエリーにミス  
ジャッジが多く、あまり気持ちのい  
く試合ではなかつた。

懸命に攻め、両軍必死の攻防が続  
けた。一方湘南も後二点と

まづかつた。しかしこの試合はレフエリーにミス  
ジャッジが多く、あまり気持ちのいい試合ではなかつた。  
市村からの縦パスをCF佐藤(晃)と

て、バックスを二人抜き、そのま

△決勝 十一日二三日(日)

まゴールに押し込んで一点。この

対鎌倉学園 一四時

あたり佐藤の馬力はすさまじかっ

た。前半は1-1のまゝ終了。

後半も、始めの十分の得点を目

栄光 0 — 0 — 5 鎌倉

キツクオフー栄光

指し、見事成功。後半九分IJ加藤

からのパスをCF佐藤(晃)左ヘバック

スを振って大きくヒネれば見事ゴ

ールイン。彼の得意のコースであ

つた。尚も十分RW山田からのパス

をドリブルでもって行き、虹市村

後半も始めの内は前半同様、し

かし一七分敵縦パスを川田畑頭上

を越させ川林舍にバックパスした

が敵CFに押され足元狂って敵の逆

バックスの好守で押しつ押されつ

したがそのうちダラダラとなりタ

イムアッス。

一。一度がツクリ首を垂れた彼も

持前のファイトと皆の声援によっ

て、以前にも一層ファイトをもや

す。しかし敵はRW辻のサインをよ

く守り、二〇分、二四分と連続得

点を許してしまう。二七分敵シュー

トがゴールバーにはねかえり、

伊林(吉)とろうとしたがタイミングを

合わず虹に突っ込まれ追加点を許

し、更に30分敵IJの逆サイをRWそ

のまま持ち込み栄光バックスを巧

みに抜く、というより蹴散らして

シュートすれば又もや決って結局

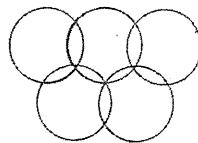
5-0で破れてしまった。メンバ

ーは前日と同じ。



Member  
GK 林 石山  
RB 大 石山  
LB 内 石山  
RH 篠田 市  
CH 石山  
LH 赤山  
RW 虹市  
CF 佐  
LJ 加  
LW 萩  
GK 14 E  
GK 2 CK

0 11 10



オリンピック

# 選手育成合宿 に参加して

-特集-

十期 市 村 俊 一

昨年の十二月二七日から三十日まで、藤沢県営グラウンドで三泊四日ウンドで三泊四日の合宿があつた。この合宿はオリンピック選手育成合宿として行われたが、現在日本サッカーリー界に於ては、オリンピック選手育成よりもまず、サッカーをさかんにする事が大切なので、神奈川県に、県下のサッカーリーをさかんにしようという目的を兼ねて行われた。徒

で、藤沢県営グラウンドで三泊四日の合宿があつた。この合宿はオリンピック選手育成合宿として行われたが、現在日本サッカーリー界に於ては、オリンピック選手育成よりもまず、サッカーをさかんにする事が大切なので、神奈川県に、県下のサッカーリーをさかんにしようという目的を兼ねて行われた。徒

(1) 日課表

時	課	床	除	面	食	習	食	習	浴	食
7	日起	拂	洗	朝	練	昼	練	入	夕	食
8				9:30						
11:30										
12										
13:30										
16										
18										
19								meeting		
20										
20									就	寝

(2) 当番

ボール

グラウンド準備

食事

当番

(3) 班制 一～三班

マッチ、チーム、東軍、西軍、

まず主要な部分、練習内容とミーティングの内容を発表しよう。

練習内容

つて合宿で基本技からチームプレーまで広く行い、これらの技術、練習方法を学び、各チームへ帰つて奥行してもらいたいというの、水協会の意向だった。県下の高校から各一名、或いは二名づつの次年度選手計一七名が岩淵、宮原の両コーチのもとで合宿に入った。栄光からは私が参加したので、合宿の経過と新しい収穫を知らせようと思う。

始めと終りのランニング、体操は除外する。

二七日 午後

スタートダッシュ、ターン、スワープ、サイドキック、ラウンドキック、ペナルティーキックへ

人一本)トラップ、スローイン、マッチヘント

ラップ、ノントラップ)

ラウンドキックは、ただ大きく蹴るだけではなく、あらゆるボールをインステップでキックするもの。コートの笛によつて、ゴロ、ライナー、ロビング、低く蹴れといわれても仲々蹴れないもので、中でもゴロは一番むずかしく、利き足はともかく、逆の足では、ほとんどのものが、半分以上のボールを上げてしまう始末であった。融通の利くキックの、よい練習となつた。特にフォワードの練習には良いと思う。

マッチは、ワントラップマッチ、ノントラップマッチの二種。前者は一人が連続三度以上ボールにさわってはいけない。後者は、ボールに一度しかされないもの。いずれも攻撃の際の、テンポの早いパスとスレイヤーのするどい動きの練習となり、栄光

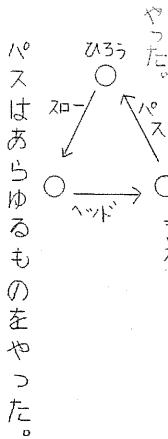
のよくなショートパスを主とするチームでは、このような練習は非常に有効なものだと思う。全員が緊張して、よく動けばずい分効果が上がる。

二八日 午前

パントキック、スローイン、ヘッディング、ドリブル、バス、マッチ、

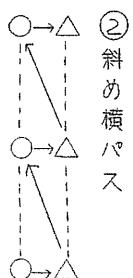
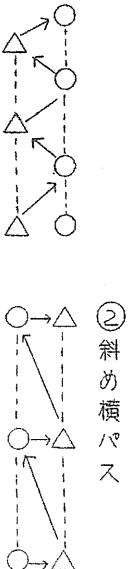
パントキックは体中をつかつてボールを成可く、多く地面に落さぬよう蹴るもの。ボールコントロールをつけるのにそうとう役立つから、昼休み、放課後などに、又、ボールになれるためにも、練習前の5~10分の間に、自発的にやってもらいたい。後のも

のはいずれも、ボールが一人に一個づつあるのでいい分かつたが能率がよかつた。またスローイン、トラップ、ヘッディングを三人一組でやる練習も



バスはあらゆるものやつた。

① 2人の斜めバス



二八日 午後

パントキック、ドリブル、パストラップ

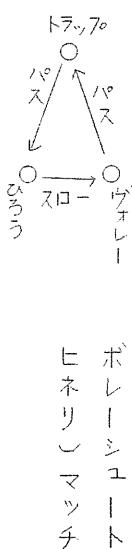
ワンバウンドへ体の中心より  
浮き球 足で 地面に落ちる前に蹴る  
体で 前で 後で

フロスキック

ワントラップ(二人一組)サイドキック(アウト、インサイド、三人一組)マッチ(ワントラップ)

二九日 午後

サイドキック(アウト、インサイド、四人一組)  
スローイン、ボレーキック、トラップ(三人一組)  
トラップ パス バス ヴォレー  
スロー ポレーシュート(正面、  
ヒネリ)マッチ



午前中はヒネリ、午後はボレーを重点的に行つた。いずれも練習量が問題なのでこのようものは、毎練習欠かさずやっていればいいぶん伸びるだろう。ボレーはミートが一番大切である。パントキックによる浮き球に対する感が大分アラスになつたのではないかと思う。

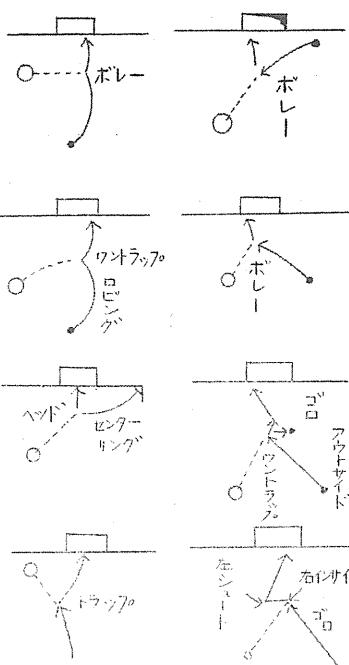
三十日 午前

サイドキック、スローイン、ショーティング、マ

二九日 午前

片足飛び、ウサギ飛び、カニバイ、スクープ、サ

ショーティングはあらゆるボールを蹴られた。



スローインは毎日のようにやらされて、腹筋がそ

うとう痛くなつたが、私はたつた四日の練習で、5  
cm伸びた。自分でもおどろくくらいである。誰でも

軽くペナルティーエリアの中まで飛ばせる。結局こ

れは練習量がものをいうから、いつも暇な時やつて  
いれば、ずい分効果が見えるものである。現に、K  
Jの石原氏は、寝る前、枕で練習したといふし、K  
Jの富野氏は放課後のたゆまぬ練習から、両者とも  
蹴球部一の投げ手である。

マッチは、最後とあつて、20分を4回、向に沢山  
注意を入れた。時には、バスのために、ワントラップ

アマツチでやつたり、又せり合いの練習のため、キック、アンド・ラッシュの戦法をとつたりした。尚、岩渕コーチが、フレーに注意を払うのに、試合中にどんどんハイスクルを吹き、マッチを中断させ、一つ一つのフレーを説明していたが、これは理論よりも実際のサッカーを知るために非常に良い事なので今後栄光も、アントワ、又先輩諸兄にこのようない事をやってもらうつもりである。

### ミーティング内容

講師 岩渕氏

ここでは直接試合に關係する重要な面だけをあげておくことにする。

### ○融通の利くサッカーへ

サッカーの基本技と言えば、普通誰でも、キックが浮ぶだろう。その後に、ドリブル、パス、トラップ、ヘッディング等々。中学、或いは高校一年ぐらいだつたら、まだこの程度でしかたがないとしても、高校、大学、一般のサッカーというものは、その基本がトラップとボールコントロールにある

とみてよい。我々も、体験から、どちらかと言えば、キックよりも、トラップ、ボールコントロールの方がむずかしいと思うし、又これに時間をかけていることは確かである。そしてまた、これに時間をかけなくてはならない。これを待ち合せていないチームのキックの応酬では、一向良い試合にならないのはすぐ想像できると思う。そして、これらのキックはどんなにすばらしくとも、すべて無意味なものになってしまふ。というのは、野球に例をとつて見ると、もしバッターが、ロングヒットもうてるし、うまいバンドもできるとしよう。守る方では、大きいのを放つと思って深めに守れば、うまいバンドをされ、そうかといつて浅く守れば、頭をこざしてしまふ。そこで困るわけである。そこで、初めてバッターの技術が生きてくるのである。しかし、これが大きいものしか打てないバッターだとしたら、皆深く守れば事は足りる。もし大きいのを打てないバッターだったら、前進守備をとつていれば十分である。このような事はサッカーでも同様に言える。ロン

ができた時、初めて生きてくるのである。逆に、細いパスも大きいキックができる時に初めて生きてくるのである。何故なら、そこで敵はちゅうちゅうするからである。ここから、融通の利くサッカーというものが要求されてくる。

#### ○フォーメイションと個人技、

試合に於けるあらゆるフレーは全部得点というものに結びついていかなければならぬ。点を入れなければ勝てないからである。そして得点は成可く、簡単、単純な方法によるのがいい。キーパーが思い切って蹴つて、センターフォワードがそれを取つてシュートして入るなり、それにこした事はない。しかし、それはいかない。そこで得点という単純な事を、あらゆる複雑な万法をもつて行うのである。ここで考えられる事はこれからサッカーというものは、ボリュームはバッターフォワードはフォワードと分けて考えることはできない。つまり一人のスポーツであるという事がはつきりしてくる。特にフォワード等は、どんどん空いている所に走り込まねば、仲々

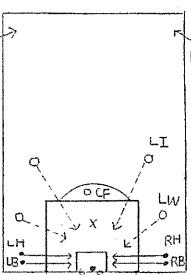
得点できないことは君も知っているとおりである。バックであっても、攻撃を押さええる事のみではいけない。それでは、義務の半分で、その次にその

ボールを攻撃に持つて行かなければ、完全なバックのアレーとはならないのである。そこからアレーヤ

ーはポジションにこだわる事なく、どのポジションでもこなせるようにならなければならない。せめて自分のポジションの周りのポジションは、充分にこなせるようになる必要がある。ワイングならば、センターやインナーぐらい。センターならフォワード全部、サイドハーフ、インナー等はどこでもこなせるようにならなければならない。これから、バックアップの必要性がでてくる。空いている所へ動けるようににならなければならない。これから、体形を考えるなという事ではない。Wという基本体形はあくまでも必要である。だから、フォワードの一人、インナーがはげしく動いたなら、サイドハーフなり、逆のインナーなりは、必ずそこを埋めて、体形をととのえておかねばならない。そして、攻撃している時であるから、バックは「人ぬけた時の万全の

体形をととのえるのである。つまり、ボールを持たない者が、どれだけ良い動きをするか、という事がいちばん大切である。

### ○ペナルティキックの際の位置



※攻撃側(左側)のCFがキツカーのとき両インナーは、ペナルティエリアより後方に位置し、ボールがインプレリアに入るよう助走をつけてタッシュする。ワイングも同様に動く。これはキーパーがはじいたときにそなえるためである。そこで守備側(右側)のバックスもそれにそなえて助走をつけて、ゴールラインにそつてダッシュする。助走をつけるのは、ペナルティエリアのすぐ外からスタートするよりも、スピードがつくからである。しかし注意しなければならないのは、もし、ボールがインフレーになる前に、ペナルティエリアに入った場合はキックがはずれてもやり直しになる事である。又、キッカーは必ずホイップスルが鳴つてからキックする事。守備側のウイン

外は、タッチライン外に位置し、バスがきたなら久  
ランドに入るよう、ボールを取る。この方がトラッ  
フしやすい。

### ○練習態度について

練習はメンバーの気持によつてその内容が大きく  
左右される。まずファイトを持つて悩む事。ファイ  
トがなければ何もならない。つまらない練習は必ず  
ファイトがなく、ファイトみなぎる練習は、いかに  
効果が上るか皆にも経験があるだろう。そして大切  
なのは、いつも研究心をもつ事である。ただ漫然と  
やつていては進歩は少ない。失敗したらどうしてか  
、どうすればよいか、又うまくいつたらどこが良か  
ったかと考え、悪い所は改め、良い所は伸ばすよう  
心がけるのである。とかく練習量の少ない栄光にお  
いて、最少の種から最大の収穫を得るためにこの事を  
しつかり実行してもらいたい。そのために上級生、  
先輩を使うのも一手である。そして自分の技術をど  
んどん伸ばしてもらいたい。

## 最近感じた事

九期 内山正樹

ヘッティングに劣っていた事だと云われている。GK古川のあの猛烈なキックを見ても、日韓の間にそれほど大きなキック力の差がない事が解る。私は独り善がりの看え方ではあるが、あの試合での敗因は韓国の方が体全体を使つたサッカーをした事だと考える。そして、日本人が「サッカーは足でボールを蹴るスポーツだ」と云う概念を捨て、「サッカーは手以外の体全体を使うスポーツだ」と云う新しい概念を持たない限り、日本は世界一流のサッカー国にはなれないだろう。

日韓戦と云えば、非常に印象に残つた事があつた。それはハーフとして出場すると見られていた車泰成がJFで出場し、幼きの全然違うポジションを見事にこなして

いた事と、平木を中心とする日本はポジションを超越した、あるいはポジションを超越した、ある程度無視されたと云つてもよい位、ポジションに拘束されない動き各プレイヤーが各ポジションをこ回るサッカーであろう。この場合各の者的一部がくるのだから、唯なせなければならぬ事は当然である。この事から考えて日韓戦で見られた前記二つの事は非常に大きな意味を持っている。しかし、私達の様に技術的に未熟な者がKからFWまでをこなすと云う事は不可能である。そこで、せめてKからFWまでをこなすと云う事は如何にしたらよいか。体格的に劣る事からくる不利な点は、主に体力とヘッティングであろう。前者は、必ずしも体格のよい者が体力があるのでないし、練習により体力をつける事も可能であ

いた事と、平木を中心とする日本は皆野球にいってしまい、優れた体格が要求されるサッカーには残りの者的一部がくるのだから、唯できてしまふ」と云う事が書いてあつた。これは確かに重大な問題である。将来においてサッカーが野球に替つてもらいたいのだが、これは出来ない相談だろう。それで如何にしたらよいか。体格的には如何にしたらよいか。体力的に劣る事からくる不利な点は、主に体力とヘッティングであろう。前者は、必ずしも体格のよい者が体力があるのでないし、練習により体力をつける事も可能であ

ちょっと考えてみて、これはどう

できる。

しようもない様に思える。しかし、身長をある程度カヴァーする事は出来る。それはホーにジャンプ力をつける事だ。ヴァレイボール等ではジャンプ力の事が非常に強く言われる。それなのにサッカーでその事が云われるのはどうしてだろうか。ヘッディングで、ジャンプする所ではないでは威力は倍は違うし、高くジャンプすればする程有利なのは当然である。

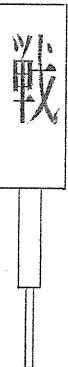
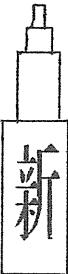
ジャンプヘッドの際重要なのはタイミングである。このタイミングを良くするには、浮球に対する勘をつける事が第一である。浮球に対する勘がつく事は、蹴られたボールの落点にいちばんよく達する事ができる事でもあり、ヘッディングの際の身長の不利を補う事も

。「」の勘は理屈を抜きに、経験か

勘で思いつく事がある。これは、「二、三年の栄光の試合を見て見るに、オフサイドの多い事である。いろいろの試合を見た時に、オフサイドが多い事は日本特有の欠点」というわけでもないらしい。何はともあれオフサイドが多いと云う事は、非常に大きな欠点だ。オフサイドの位置にいる事は、かなり敵陣深く攻めこんでいる事であり、折角の攻撃がフイになってしまう。かといつて常に気にしながらヘリする様では、思い切ったスレーができない。それではどうしたらよいか。ある程度までは不注意をなくす事により解決出来るだろう。しかし、七つの場合には勘に依る以外どうしようもないのではなかろうか

。生まれてくるものだと思う。経験が浅い私達にはなかなか難しい事だが、せめて不注意によるオフサイドではなくしたいたのだ。とりとめもなく色々な事を書いて来たが、最後に技術面以外の事を一つ付け加えておく。これは、前号に於て泉頭さんが言っていたが多大された自主性を持つておられた「拡大された自主性を持つて」と云う事を、今年こそ是非実現させてもらいたい事だ。確かに部としてのサッカー部は創立八年にして栄光内でも有数の自主的な部に生長した。しかし、個々の部員の部員として、又栄光生として非常に自主的であるかどうかは疑問である。

部としての自主性とともに、個人としての自主性を持つ事を願つて止まない。



## 対鎌倉学園

二月一四日(日)三時

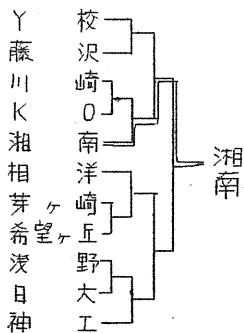
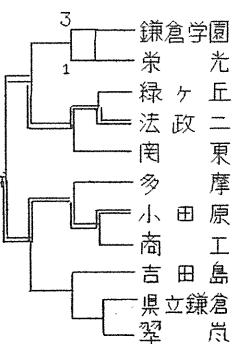
キックオフ 鎌倉

栄光は三連敗の鎌学に対しファイトを燃やし、前半十分の得点を目指し、成功して、五分、佐藤が一点入れた。又栄光押し続けるが絶好のチャンスを度々逃がす。シートすれば入るのを敵バックをまいつけて、ヒられて見たり、トラップを二度してみたり、みつともないプレーが続いた。二四分敵CFへ山から渡ったが、林のマーク一呼吸遅れ、並行に走ったが、如何せん、短身足の嘆きが、見る見る離され、阿部、つられてふらくと出た所を決められ、更に二

五分、RW、RIのパスにフルバックが振られ、阿部飛び出して、取ら

んとする時、タイミニングはずれてもアーリーで、阿部石山原一郎、内石光丘二東摩原工島倉嵐ケ政多小吉県翠トが無いとの一言を怒りと激励をこめておしゃつた。

メンバーメンバー  
G K R L R H C L R R C L L W I F I W



# 人間 試験 翼練 レンジ

防大との練習試合は、五期生川喜田先輩から申し込まれの申し込みにより八月上旬にやる予定だつたが、タラントコンデイション不良のため延期され、九月に入つて二十四日の秋分の日に秋分の日に行はれ一試合のつ

もりだつたが、防大からの要求によりダブルヘッダーとなつた。この日は曇天で暑くも寒くもなく絶好のサッカー日和だつたが、クランドがぼこぼこで、あまり強くもない風に土が舞い、丁度藤沢県営グラウンドのクレイコートが乾いた時の様な状態だつた。第一試合は、前半は互角だつたが後半はセーランドコンデイション不調か、川喜田さん等正選手を三、四人出してきたので、かなりの好試合となつた。前半は栄光が、後半は防大が優勢に試合を進め、結局二対二の引分けに終つた。

試合終了後の通り風呂に入り、それから（二）が大事）——全員川喜田さんにおひつてもらつた。」その後、松田中前、太田、林吉ら十二、三人の野郎はトックイになつてブルで泳いでいた。（この河童供はサッカーやって来たも同然で、試合前から泳ぐ事ばかり考えていた。）

栄光 3 — 0 — 0 防大二軍

しかし第二試合になると、防大は二連敗をしては面白がないと思う訳か、川喜田さん等正選手を三、四人出してきたので、かなりの好試合となつた。前半は栄光が、後半は防大が優勢に試合を進め、結局二対二の引分けに終つた。

一方防大は十五分過ぎた頃から調子を出し、互角に攻め、中距離シートなどで栄光のゴールを脅す。だが、僅かなところではされたり

点出来ず、両軍無得点のまゝ進んだ。その後も、〇君の言を借りれば「思わせ振りの試合」で、無得点のまゝ時間は経過し前半を終了した。後半に入り、栄光はCFに負傷中の大泉を入たのを初め、各ポジションともメンバーを一新してあたった。これに対し、防大もかなりメンバーが交っていたが元気なく、最初から栄光の一方的試合となつた。そして十分十二分と連続して大泉がゴールを奪い、更に終了前SH中山がドリブルで割つて入つてシュートを決め、三〇〇と防大をシャットアウトしまず一勝をあげた。

。第二試合（二十五分ハーフ）  
栄光 2  
0-1 1  
2-1 1  
2 防大

Hに川喜田さんを入れ、RHからSHにロビンタをあげ、SHから防大はFWに二人の正選手を出

し、二人の個人技を中心にはめてきた。これに対し栄光バックスもよく守り相当つぶしていたが、十分左からのセンターリングをSHにヘッドで決められ、初の失点を許した。しかし栄光もよく攻めた。まずこの直後、LW佐藤のパスがゴール前を横切るところを、R木下見事にゴールしたが、これは惜しくもオフサイドを取られ得点にはならなかつた。しかし十五分RI中前が中距離をゴール右隅に決め、同点に追いついた。更に

二十分中前SH木下のトライアンブルパスが成功し、木下がドリブルで切れ込み、GKのセーヴィングをうまくかわして決め逆点に成功した。後半になると防大は更にRHに川喜田さんを入れ、RHからSHにロビンタをあげ、SHから

CFに縦バスを出すと云うレギュラーハーフを軸にした攻撃を見せた。この攻撃に対し、栄光はSH木下煙を中心に良く防いだが、十分ついにRH-LW-ICFとパスを廻され、CFに決められてしまつた。栄光は両ウイングを走らせる戦法を使い、絶好のチャンスも三三あつたが得点できず、ホイッスルが鳴つて引分けに終つてしまつた。引分けにはなつたものの、ファイトがあり球の動きも早々好試合だった。

メンバー  
メンバー  
林 石山 井田 山田 代泉 藤(候)  
大内 新太 中松 田大 佐近  
部野 島田 煙水 下前 田杉 藤(即)  
阿唯矢 太田 清木 中松 宮佐  
GK RKB LRB CHH RWI FWI CFI LWI

## 対 緑

ケ 丘 高 校

一月十七日 キックオフ 栄光  
十二時半キックオフ。

朝から風が強かつたが、高台にあ

る緑ヶ丘のグランドは特に風が強  
く土が舞い上がる。今日は高一を主体とした新メンバーで始めての  
試合であるので勇んで試合に臨んだ。  
十二時半栄光のキックオフ。  
そのまま緑ヶ丘に攻め込む。前半  
はずっと押したまま時々栄光陣  
内に球が入って来たが無理に守り  
通した。しかし点は市村、佐藤のわ  
ずが二点しか入らなかつた。後半  
は風上を取り有利に攻める。しか  
しもうすこしの所で押しが足らず運が付いた様に続けて二点三点を  
一人で入れてしまった。この試合  
は5対0ではあつたがファイトが  
なく期待された程点も入らず凡試  
合の内に入ろう。この試合が終つてから中二の聖光  
との試合を見た。その模様は他に  
書いてあるからここには特別述べ  
ない。我々高一はこの試合が終つ  
た六期生栗原主将は「すべてファ  
イトの賜物です」と言つていて、七期生佐々木主将は、皆にも記憶  
に新しいと鬼う。三連敗のどん底  
から中前の象によつて晩飯をご  
ちそうになつた。例によつて守ち  
やんの歌等を聞いて楽しく過ごし  
て七時半頃家路についた。この若々しいすさまじい精神これ  
が蹴球部の伝統である。今までに  
負けないファイトのチームで打て  
打て、打ちみよ、われは死なじ  
あのフェニックスの精神に基いた  
ファイトのチームを養成するのだ。点は入らなかつた。上記の試合で  
さんのミドルショートが開幕に入  
つてしまつてからは田代さんに基  
運が付いた様に続けて二点三点をさくされるよがんばるのだ。  
創立時代の佐野大先輩は、試合中  
に二発ミズオチに食らつても、顔  
ひとつ変えないでがんばつたそ  
うだ。豆タンク荏原さんは、あの小  
さな体で人一倍走りまくつた。

# 蹴球部今年の抱負

新主将になつて

十期 市村俊一

部員一人一人がこれを自覚して行動すれば、はりあいのある部活動になるにちがいない。

「特徴ある一年に」

総勢七十人近くの大家庭に育つた蹴球部は、今や新しい年のスタートに立つてゐる。ここで主将としての今年一年の抱負をのべてみたい。

今までにないこの人数を上手に生かす事が一年をうまくやっていく力がであろう。ひとつ大勢でなければできない大きな仕事を、この機会にやってみたい。

「何事もフアイテムをもつて」

ここ七年前進に前進をかねてきました蹴球部を小りかえつてみると、毎年すばらしい活動をしているが、そのなかにもある学年ごとに必ず一つのカラー、特徴をもつてゐるのに気がつく。そこで今年も六十年度のカラーを生かし、特徴ある一年にしたい。今年の特徴といえばまず部員の数が多い事である。高二、十七人、高一、十三人、

しかしこれは大へんな仕事である。まして初めての事であるからきっと何回も何回も壁につきあつるにちがいない。そこでくずれてしまう者は、若人でない。学生でない。蹴球部の歴史はそんなものではない。蹴球部の歴史はそんなものではないはずだ。そんなときこそ

「もう一度西宮の土を」めざしてがんばりたい。中学はもちろん県大会優勝である。昨年は不運統一で、表面には好成績としてあげられないはずだ。そんなときこそ「ファイト」をだせ。若々しきフアイテムをもつてつきあつたれ。そしてあのカツフをとりかえしたい。

「試合成績において」

成績の方面をみると、今年も、中学、高校とも昨年、一昨年に劣らないメンバーを有している。

高校は関東大会、全国大会の二つに目標をさだめる。ここ二年、不

県下の技術の水準もだんだん向上し、他の学校が伸びていくのに反して、従来と変わらない、他校の半分、あるいは三分の一の練習量で例年よりも良い成績をあげる事は容易な事ではない。よほどがんばらなければ、またある程度運が向かなければ無理かも知れない。しかしやらねばならない。そこにはリフアイトがあるのみである。

に大学へいき、大人になってからも「栄光蹴球部の生活はよかつた」といえるようなものにしたい。そして部でなければ味えない、経験できないあらゆる事を、やつてみたい。具体的にいえば、部を家庭的雰囲気に満ちたものとし、つまり横はもちろん、縦のつながりを強くし、上級生も下級生も一體となつて活動することだ。部員は年令、学年はちがつても同じ蹴球部という家庭の一員である。そこで年令を越しての友情が生まれるにちがいない。

ど後の楽しみは大きいのだ。この楽しみは部生活を営む、スポーツマンにしか味わえないすばらしいものである。我々にはこれをうける権利がある。この機会をのがさずがんばるのだ。僕も一年間県命にがんばる。部員の諸君の積極的協力を望む――

部生活は部員が作りあげるものであることを忘れずに。

若々しいリフアイトをもってこの一年間はりきつてがんばろう。

最後に新しい出発に際してのbett

語は

ク部生活においては「試合、練習を除いたいわゆる部生活をどのようにもつていくか。中学、高校時代は二度とない——若々しさのみなぎるすばらしい時代であるから当然有意義にすゞすべ

きであろう。そんなとき、蹴球部がその手段として選ばれ、また後

苦しいときでもがんばってほしい。苦しみが大きければ大きいほ

# 頑張れ十一期

副主将  
林 茂

栄光の中學の歴史において、昨年ほど波瀾の多い年はあるまい。たとえ拙戦負であろうと、何であらうと、明らかに県下のトップアーチャーを脱落し、栄光中學サッカーの歴史に一つの谷間を作つたといふことは、聽しようのない事実である。D A S H をめくつて、今までの成績をふりかえてみてみると、十期九期八期七期六期とすべて優勝あるいは二位と、まつたくヒマラヤの高峰を端から、かたづぱしに征服してきたような感じである。確かに栄光は強かつた。技術的にも精神的にも。毎年県下

の優勝を争うに充分な実力と、勝利へのひしひしとした気迫を持つていた。残念ながら、昨年は力はないであろう。今までは、その存分に發揮し切れずに、破れてしまつたが、別にここで、彼等の失敗を非難する気など毛頭ない。彼等はすべで終つたのだから。

ここで話の焦点になつて来るのが、今年中三となり、今年の中學をになつて立つ十二期の連中どうである。まず、君達は、かつてない大きな任務を背負つていることである。もちろん、その任務とは、事においても全盛を極めたものがまた。これ、再建である。栄光中學サッカーの建て直しである。何事においても全盛を極めたものが一度がつくりと崩れると立ち直るのは、大変むずかしいものである。サッカーの場合には、特殊なものであるが、やはり建て直しには相

当の苦労困難を乗り切らねばならぬ。今年の栄光にとつて新しい苦労は、他校の栄光に対する自信の増大であろう。それは君達にヒつて最大の苦労となろう。昨年の夏の大会で、栄光が惨敗したすぐあと、片瀬と白山が対戦し、猛烈な白熱戦を開いた。その試合を見ていたあるサッカー関係者が、こなんことを言つていた。栄光なんか問題じやないね」と、……俺は、この言葉を耳にした時はつと心がしまつた。君達も今、この言葉を読んだらやはり同じよう心が動搖するであろう。俺は

学校の生徒から同じような意味の言葉を聞いた。今年の苦労とは、このことである。きっとやつらは栄光に対しては、自信に満ちたフイトで、『栄光なにするものぞ』と

向つてくるだろう。その時、君達は、それに対抗できるだけの精神のまとまりが必要となつてくるのだ。

さきほど、サッカーの場合は特殊なものであるがといふ表現をしつもりである。何故サッカーの場合は、特殊なものであろう? 他とちがつてているのであろう?

それは、サッカーというスポーツ

トと団結によるのである。九期生はファイトで勝つた。十期生は団結で勝つた。はつきり言う、一期生は、両方なくして負けたのだ。ここに十二期生の進むべき道がおのすと開けてきた。それは唯の道である。それはファイトの道である。それは、ファイト、団結への道である。県下制覇に到るまでの、障碍物の多い、苦しい

カーニバルの世界、詔行無常の響き、盟約必要の理もあり得ないからである。もしもあつたとしたら、それ

冬の大会でも、今度はある他の

困難を避けるな。

行く道は一つだ。

進め！進め！

ひたすら目的地をめざし

岩を碎き、じやま物をどかせ

行け！行け！

ガツチリ・スクラムを組んで。

言葉を思い出し、歯きくいしばつ  
て、がんばつてもらいたい。そ  
うすればかならず六月には県営のク  
ランドで優勝の感激にひたること  
ができるだろう。

G O S S I P

A T



けわしい谷間の底にいる栄光は、  
これから、その切り立った岩の

こつこつした崖をよじ登らねばな

らぬのだ。例年と同じファイトで

は、崖の中腹までのエネルギーの

みで、勝利という頂上に登るには、

二倍のファイトがいるのだ。こ

れが君達に欠くべからざるものな

のである。

今年一年、どんな困難にぶつか  
ろうが、どんなつらい練習があろ  
うが、ただ栄光中学の再建といふ

電報ですよ。ちえおきねえなあ、

二日の朝、ウソかホントか知ら  
ないけれど、ウルチがいうことに  
丹沢はクマは三十三頭いるそうだ  
。帰り林道からミノゲへの近道で  
急にガサガサのバタバタとしたと

思つたら、大石君が「ウハックマ

だ。」と中前君にヒビつきました。

「ギヤーし中前君もビニールを

裂くような悲鳴を上げて走りました。

町田君が仰天して、フラン

ト上を向くと、なんと巨大なキジ

が飛び立ちました。とたんに遠く

でバーン、そのキジを打ちました

がはずれました。これは本当のイ

ギモノ、鳥のキジのオハナシ。

大晦の晩は徹夜して、元旦の朝  
から床に入つたが、大石・睡野・  
中前、町田四君の予約指定特別床  
にK2のフランとやつて来た秋山君  
が、スマスマといとも罪の無い廻  
をして寝息を立てている。町田君

は彼をどかそうとして、いうこと

しきり、「もしく、秋山さん、

集 = 特 =  
—その2—

中 I は  
こ、うして  
入部した

渡辺 浩君

入学した頃、ぼくは別にサッカーチームに入るつもりじゃなかつたんです。小学校でサッカーをやつた時も大きな手に蹴られたり、ひつかかれたりさんざんな目にあつて、サッカーで野蛮なスポーツだなと思いました。なにしろ十五人ずつのチームでせまい所でやるん

ですからそれはひどいものでした。でも一学期、学校の帰りにサッカー部の練習を見ていると広い広いグラウンドで暮れるのがなんとか樂しそうに思えました。

そして二学期、何部に入りたいです。佐藤君はお兄さんに似てとっても強精です。その佐藤君がぼくに「一希望と二希望を入れかえろ、入られかえろ」と勧めました。ぼくはバレーの方がサッカーより好きといふ訳ではなかつたので「じゃあそろしょうかな」といいました。

すると佐藤君はぼくを先生の机まで引っぱって行つて、ぼくに「先生、すみませんけどオーワン希望とオーツカ希望をバレー部と書いて先生に出し

ました。

このままだと今ごろぼくは、バレーチームに入つて、突き指をしている境地のですが、ここにある一人の人物が現われ、ぼくの運命を決しました。それは十期生の佐藤晃一君の弟の佐藤純一君でした。佐

う成功しました。先生は「渡辺

大丈夫か?ほんとに大丈夫?」と

心配して下さいましたが、そうい

われてはぼくも男の意地で「ええ

、平気です。サッカー位」といっ

てしましました。そしてぼくはサ

ッカー部に入ることに決りました。

ぼくはこうしてサッカー部に入

りました。でも今ではサッカーが

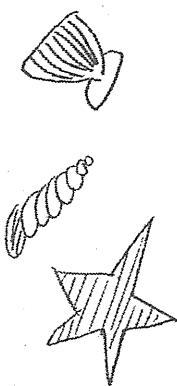
本当に大好きになつて毎土曜日、

佐藤純一君に「そろじやない。こ

うやつて、ダメだなあ。」と怒ら

れながらも楽しく練習をしていま

す。



## 青戸邦嗣君

栄光入学が決定した日、ぼくは体操部に入ろうと思つた。(へ何しろ小学校時代には、ぼくは学校中で一番の鉄拳の名手だったのだから)ところが、その話を親父にしたところ、親父はぼくのヒヨミ(まつたくあきれた野郎だし)と言わんばかりの顔をして見た。そしてぼくに「栄光手帳を見せてみろ。」といった。そこで、ぼくが見せたところ、部の種類の書いてある所を見て「サッカー部があるじゃないか、これにしろ、サッカー部に入れ!」と言ってきた。何を言い出すのかなと思つていたぼくもこれにはおどろいた。何にしろサッカ

ーなんてスポーツ(どうもすいません)は小学校の時は一回聞いたことがあるだけで、どのようなものか全然知らなかつたのだから。しかし、親父はそれからというものが決まりました。それは毎日「サッカー部へ入れ。」とばかり言つていまし。そんなものだから、ぼくも少しだけばかりサッカーというものに興味がわいてきました。ところが、親父-  
というのは学生時代にサッカーをやつたことのある人間なものだから、ただ「サッカー部へ入れ。」だけではなく、自分の経験まで語してくれる。何でも親父はRNだつたそうで、仲々素晴らしい活躍をしたそうだ。又練習の時に、足にまめが出来たのをつぶされて、そこにヨーチンをぬりたくられて、その足をスペイクへ少し小さかつたらし

いに無理やりつゝこまれさせられた。という少々気味の悪い話もしてくれた。そんなもんだから、ぼくもとうくサッカー部に入つてみようという気になつた。ところが、そこまでいつたぼくも創立記念祭の時、山岳部の展示会を見て急に山岳部へ入りたくなつた。その事を親父に話すと、今度は親父「テニス部へ入れじ」と言ってきた。大体、ぼくはテニスというのだけはきらいだつたものだから、その話だけは全然乗り気がしなかつた。そして、一学期のスポーツ大会の時にサッカーに出てみた。

その時はB組にあつさりと1-0で敗けてしまつた。へもつとも、D組とA組が棄権したのでこの試合は決勝戦であつて我々は2位であつた。(しかし、二学期になつて

又もう一度、今回はスポーツ大会でなく、何だか知らないがサッカーの試合があつた。(この時はまだ入部していなかつた)対戦相手は前と同じくB組であつた。ところが今度は、前回と違つて我々が3-0で勝つてしまつた。しかも、しかもである。その3点のうち2点はぼくが入れたのだからとてもうれしかつた。そして、ぼくがサッカー部に入部願を出したのは、それから一週間ばかりたつてからのことだつた。

まじでいるのを見た。サッカーは非常に面白いということは知つていたがその時はまだ部に入つてまでサッカーをやってみようとは思つてゐなかつた。しかし学校通りが始まってからは先輩の練習していふ姿を見るにつけ、そのすさまじいファイトに心を引かれ、ついにサッカー部に入ることに決めた。そして二学期になり、夜入部が許されることとよつたので僕は勇んでサッカー部と書いて出した。すると自然にファイトがわいて来るような気になつた。その後、土曜日となると勉強がうわのそらになりがちで午後の練習の事で頭がいっぽいになつてしまふ。始めのうちシヤツ等の練習用具が真新しくて今まで午後の練習の事で頭がいっぽいになつてしまふ。始めのうちシヤツ等の練習用具が真新しくて今まで途中、蹴球部の先輩その時はまだ違う(邊が懸命にサッカーの練習ののかもしれないが今ではそつと

う苦くない、その時かいいくらか前よりうまくはつたようと思われる。しかし実際はまだ何一つとして満足にできない。又まだ一年坊主なので他の学年とは練習の仕方が随分違う。しかし指導者にもよるが今まで僕にとってその差が痛切に感じたのはランニングである。僕は基礎が大切だと思い、ファイトで懸命にカバーできるようになつた。ランニング後の練習は色々だ。何にしても苦しい冬の北風の吹く日などボールを蹴るとへたな方が足にビーンとくる。そしてうす暗くなる頃には練習が終る。始めの頃は体力がなかつたせいか練習が終ると疲れてしまい、やっと終つたかじ」と思うことたびたびだった。そのつど「慶サッカーを始めたからには最後までやり通さなければならぬ。そのためにはどんなづらい苦しい事にも耐えなくては駄目だと自分にいいきかせてファイトを出した。その為かサッカー部に入つてからの月日はまだ浅いが

入つた効果は確かにあつたようだ。体力がついた事最後まで何とかしてやろうとする心。これはサッカー以外の何にでも必要である。これからも先輩のコーチしてください。さる事を忠実に守り、そこから新しい技術を見い出し、先輩を追い抜き、どこにも負けぬ強力チームの一員となる事が僕の最大の望みである。そのためにはこれからどんどん苦しい練習でも負けずに頑張つばならぬ。そのためにはどんなづらい苦しい事にも耐えなくては駄目」と自分にいいきかせてファイトを出した。その為かサッカー部に入つてからの月日はまだ浅いが体力がついた事最後まで何とかしてやろうとする心。これはサッカー以外の何にでも必要である。これからも先輩のコーチしてください。さる事を忠実に守り、そこから新しい技術を見い出し、先輩を追い抜き、どこにも負けぬ強力チームの一員となる事が僕の最大の望みである。そのためにはこれからどんどん苦しい練習でも負けずに頑張つ

○部室で

ボール係の陽気な工さん、部の油をスペイクに塗つている不届着を見つけた途端

「オエー、オエー、何してる。」

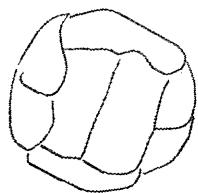
「オイと云いたかったのだろうが、

彼の日頃のロマン精神に似あはない発言、そしてある日ある時、

「俺、駅前で工さんのお父さんに会つちゃつた。」

I 「うそつけ」

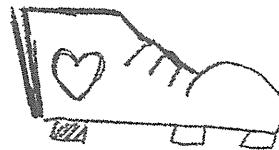
「だつてよ、駅の前でその人にぶつかつたらその人てば『オエー 気をつけろー』ってさ」



# 中 III の 日 誌 よ

十一期

也 卓 島 田



敗けた！  
完全に  
負けた!!  
三つ四つ  
ならべた  
位で俺の  
ハラの虫  
はおさま  
りそうも  
ない。し  
かし、三  
つ位でこ  
の敗戦の  
事は忘れな  
けれども、  
この苦敗を忘  
るといつても、  
練習を重ねた  
うではない。  
ただ、このまま文  
々しくいつまでも考  
え、今後の練  
習に影響してはなら  
ないというの

である。今からだつてチャンスは  
ある。三等期の間に对外試合をや  
つて自信をつけ、高工になつたら  
ミツチリ実力をつけよう。敗戦後  
のいやな、まあフンドシをつけて  
風呂に入つたようないやな気分で  
位で俺のこれを見た。

栗田さん、田畠さん、他我が中  
Ⅲをコートし応援して下さった皆  
々様どうもありがとうございます。  
た。

かし、三  
つ位でこ

## ○反省(精神的)

失敗の原因を知れば即ち成功  
すべし——フリー——ドレー——

人、心に勇ある時は悔ゆる事なし  
だ。」と思ふ。悔ゆる者がなかつ  
たならば栄光中学蹴球部はたいし  
たものだ。これから試合におい  
て又練習において「今日の試合に  
決して悔ゆる事がない。」又「今  
日の練習に決して悔ゆる事がない  
。」と言ふ者がふえてきた時二

だろう。それだ。この悔いの有無  
が自分の試合に於けるファイトの  
多い少いのバロメーターなのだ。  
だからフアイトが反かつたのだ。  
「心に勇ある時……。」の逆を言  
えば「悔ゆる事があった時には勇  
が少なかつた。」となる。数学的  
な述とはい別なくとも解るような  
気がする。皆も解るだろう。試合  
後に自分はフアイトがあつたと思  
える者でも、後悔の気持が有るな  
らば「ファイトが足りなかつたん  
だ。」と思ふ。悔ゆる者がなかつ  
たならば栄光中学蹴球部はたいし  
たものだ。これから試合におい  
て又練習において「今日の試合に  
決して悔ゆる事がない。」又「今  
日の練習に決して悔ゆる事がない  
。」と言ふ者がふえてきた時二

モフエニックスが舞う時分のだ。

への愛情が生れてくるのだ。部へ  
の愛情をもちたいと思ふものは、

辛い苦しい練習の時に「難難の人

を召すければいけない。

2、難難はんを作り

安逸は悪魔を作る。

皆は練習が辛いな、又は苦しい  
な、と思つた事が数限り無くなる  
だらう。それを、いやだな、かつ  
たるいな、と云う考えのまま通り

過してしまつた事も何度があるで

あろう。俺もある。ほとんどの全

がそうであるかもしれない。これ

からはこの辛い苦しい練習を乗り

越えて行かねばならぬ。この辛

い苦しい練習によつて、火が金を

治き上げることく人間を作るので

ある。丁蹴球と人間性といかなる

直接的な関係があるか、しと云わ

れると即座には答へられない。し

かし間接的には充分ある。それは

人間の完成によつて部内の

一過に希望の光をいつもかがやか

えられると消極的なのだ。俺は自分

のやりたい物をやつて、やりたくない物は

やだ、と云う自分勝手

が良いと言つていいのではない。

俺達は敗けた。夏の大会は市堀

に、湘南リーグでは片瀬、一中に

、又冬の大会には千代に、と数え

挙げればキリがない。しかし少し

ずつ希望をつかんでいる事はたし

めである。というのは、絶望にあ

る自分又はチームに欠点があつた場

合、コートも人の子である以上全

ては見通せないし、一個の人間が

見るよりも俺達が話し合つて批評

する方が正しい事があると思う。

又、自分で自分の事を云う方が正

を作り、安逸は悪魔を作るしを思  
い出して、察しみばかりを追はす

自らすすんで苦しみをつまぬける  
ようにしてくれ。

俺達は今まで余りにコーチに頼  
りすぎていたとは思わないか。コ  
ーチのする通りにすることは素直

いい事かもしれないが、一方で

考へると消極的なのだ。俺は自分

のやりたい物をやつて、やりたく

ない物は

やだ、と云う自分勝手

が良いと言つていいのではない。

しいはずだ。これを今までにコチに申し込んだ事があるだろうか。個人的には少し位あるかも知れないが、少しではいかんともしがたい。今度は高校でコーチ等もない。その時にはそう／＼上級生にすがらず相談する所は相談し／＼自分で立つ、即ち独立する様にしたらどうか。そうすれば、サッカーチームの一員を自分がなすのだと云う自覚もわくと思う。

### 5. 忍耐の底には天国あり。

高工は云わば下積である。面白くない事は確かであろう。しかしこの苦しい時期を忍耐力で乗り越えた時に天国へレギュラー一員がまっている。レギエラー、何と美しい音であろう。皆もこの言葉に魅力を感じるであろう。しかし、

ただ魅力を感じるだけではいけない。この言葉を自分の背中に受けた事を望むのだ！「アレが県下最強の栄光のレギュラーだぞ！」と言われる日を望め。これを望む者は忍べ忍べ耐え忍んでこそこの言葉を背中に受けられる資格ができるのだ。中学の時の力なんか問題じやない。高校は別だ。耐えるのだ。忍耐部の一員を自分がなすのだと云う自覚もわくと思う。

### 6. 合すれば則ち立ち

離るれば則ち立ち

“勇氣よ、君こそは男をも女をもいと美しく見せしむる者だ。”

サッカーは団体競技だ。それも

“God himself helps the brave.”

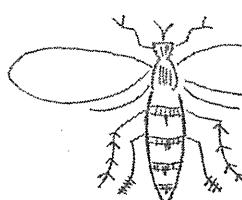
野球等と違つて本当に团结力が

この苦しい時期を忍耐力で乗り越えた時に

実力を倍増させるのだ。それがどう

まい。レギエラー、何と美しい音であろう。皆もこの言葉に一度でもあつただろ？

神は自ら勇者を助けて一つの目的にぶつかつた事が



人の考え方では六、七人でサッカーは出来ないのだ。たとえ一人まとまる事も立つとしても、サッカー部員全員が、まとまらない限りダメだらう。「合すれば則ち立ち、離るれば離るれば則ち立ち」と云々。まさに適切な言葉だ。金員が合した時に、灰になつたフェニックスは立ち上るのだ。立ち上つたフェニックスは高く舞い上り、ついには天にとどくのだ。

# 思い出すこと

九期 石原 博

中一の二学期にサッカー部へ入つてから、もう足かけ五年になる。その頃は、ボールに蹴られていた私が今では、いっぽしの先輩ヅラをして、「ハツティントのタイミンクは云々とやつているのだから時の経つのは早いものである。そこでこの間、印象に残っている事を書こう。

私がはじめてサッカーの試合を見たのは、小学校一、二年の頃だったが、兄の通っていた湘南高校で何か催し物があつて、母につれられていった時のことである。秋だつたから、インターネットの予選を

やつていたのだろう。とにかく高校生が試合をやつていた。ストックンタが片方だけだつたり、片足裸足だつたりの選手がいた。それがやたらと大きく蹴るのに驚いた。

又、ハツティントを始めて見たのだが、それが又、良く飛ぶので私は超人的にさえ見えたものである。サッカーは豪快なものだという印象を受けたが、その時はそれだけで自分でやつて見たいといふ気持はとんと起らなかつた。

その次は小学校六年の時、六期生がまだ中三だった頃だが、藤沢一中の練習試合を見にいった。兄が試合に出るというので見にいつたのである。一中のスランドには、東郷部長はじめ、四、五期生の高校生も来ていた。そこで、デンカと、三田さんと、チャーシュー

という名を覚えた。試合内容は、見る目がほかつたため良く覚えていないが、ナカさんが、ゴール前で左へよるクセがあるので左へよるクセがあるのを知ったのはその時だつた。

中二の夏休みに、東日本大会があつた。栄光が四位になつたあの大会である。栄光の試合は三回戦から最終回まで全部見たが、特に攻守の中心であつた、C.H.のチャーシューの動きに注意していった。自分はC.H.になるつもりだつたからである。競輪場の芝生の上を縦横に動きまわるチャーシューを目で追いながら、そこに未来の自分の姿を夢見ていた。純真な少年だつたのである。藤枝東対浦和西、浦和西対遠野等の好試合を見ることが出来たが、最つとも印象に残つているのは、岳高のC.H.が、セン

ターサークル附近からのフリー・キックを、二本も決めた事だった。二本とも遠野のキーパーの両手の間を抜けて入った強烈なものだった。そのキックの正確さ、自信の強さには、大いに驚いた。オレも一丁やつてやれとばかり、その後ハーフラインにボールを置いては蹴つて見たが、何十本に一本、それもワンバウンドでやつと入る程度だった。しかしそういう大きな目標を作つて練習するのは良い傾向だとと思う。

高校に入つてから一番印象に残つている試合は、高一冬のインター・ハイの県予選の決勝で鎌倉に敗れた試合である。豪雨の中で試合開始、団体にも出場した学園は、一人をキーとした。しかし栄光バ

ツは崩れずに、前半ペナルティの一地点を許しただけで終つた。後半は爾がますます激しくなり、技術よりファイトの試合になつた。夢中になると妙なもので、私はスペイクのひもが解けてしまつたが、手が力じかんで締め直すことが出来ず、そのまま試合を続けたが結構それで蹴れるのだから、今見て見るに余つたく不思議である。後半は相手ウイングにミドルショットを決められて結局ユートで敗けた。技術、特に体力で数段劣り気持の上で相手にのまれていた試合だった。試合後のアイサツの時、主審をしていた岩渕さんが、見事でした。じと言つた一と言が、実にうれしかつた。今年こそはと意気込んでいたインター・ハイに敗れた事は残念だったが、岩渕さん

が費める程のファイトのある試合が出来たのは全つたくうれしかつた。あの試合に出た人の中には、私と同じ気持ちを持っている人も多い事だろうと思う。

サッカー部員のだれもが、試合その他の活動で全力を尽した満足感へ勿論自分に対する妥協があつてはならないが」というものを経験するよう神经でエンピツを置く事にする。

登山と  
蹴球

先日我々十期と九期の蹴球部員は丹沢へ行つた。メンバーがメンバーなので、短かい高校時代の一員に楽しい思い出として残る事で

十期 中 前

あろう。

私はこの山行きから帰つて来て考へてみた。登山とサッカーには何か関係があるに違いない。もつと考へた。ある。確かに関係がある。私はこれが分った時うれしくてならなかつた。私は登山も蹴球も大好きである。両方私の好きなスポーツである。或はスポーツと一口にいと山岳部の連中に叱られるかもしれない。しかし、私という一人の人間が二つのスポーツを同時に愛しているのであるから、その二つのスポーツの間に何らかの共通的あるものがいる。もしその二つが全然違うものであつたなら、私は氣の多い、移り気な人間となり、結局どのスポーツも真剣に愛せない人間となつてしまふ。ところが共通点は一杯ある。

るのである。オ一、両方とも歴史の古いスポーツであること。オ二、両方とも誠意と忍耐力の要るスポーツであること。誠意も忍耐もない者にあのように苦しい努力が出来る。私はこれまで私自身の愚考來はしまい。オ三、両方とも細心の注意を要すること。お互いに一歩まちがえばとんでもないことに気がつくこと。オ四、その喜びはそのスポーツをやつたことのある者にしかわからないこと。オ五に、これは私がだけかもしけないが、何の為にやつたのかその目的がはつきりしないこと。私の場合はただ好きであるからやる。というだけであつてその目的など分らない、又別に分らうともしない。しかし私はそれで満足している。なぜ山に登るか？何故ならそこに山があるからだといつた人があるが、私には魚

を求めて院を与えられたような気がして納得出来ない。そんなはつきりしない、あいまいな、人を暗示にかけるような事をいうより、ただ好きで／＼たまらないから一心にやつている。といつた方がどれだけすつきりするか知れない。これはあくまで私自身の愚考である。また最後に云いたいことはこの二つのスポーツをやつてゐる人は皆、オオラカな心を持ち混り気のない青年である。勿論登山はまだ人間の汚し切つていないこと。私の場合はただ好きであるからやる。というだけであつてあの雄大な縁の又縁のまたある時はアカネ色に輝く自然の胸中に操り広げられ、蹴球はいわば春の水コリの中でするスポーツではあるが、これを行つている人の心は皆清いものである。その他にも共通点は色々あるが皆様必知のことです。

あらうから、あえてここに表わさないことにする。

「私は登山も蹴球も好きだから、それらを一生懸命にする。私は二の言葉で筆を置きたい。

TEEN



十期 唯野 英輝

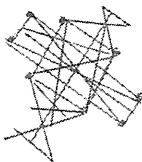
「今時の若い者は何をやっているのだ。」この言葉は最近よく聞かれる言葉である。実際今の若い者一人特に十代の人々は何をやっているのでしよう。ちよつと覗いて見ましよう。まずオーに特に昨年頃から新聞紙上をきわしている全学連。彼等は何をしようとしているのでしよう。因あ、もう私達は理解出来ないです。一種のスボも沢山いますが、

一つと思つてゐるんですかね。たゞスクラム組んでワッショイ／＼するだけですね。』と云う評論家もいる。オニに一昨年から昨年にかけてはやつたロッカビリー。それが中学生、高校生に圧倒的人氣を持つてゐるようである。それがねえ。あなた。小児麻痺の猿がギター持つて、舞台をぐろ／＼回るのとそつくりなんですってね。等と詰しているおばさん還もいる。オニ三に小松川高校生殺しで代表される少年犯罪の増加。犯罪も裁判も無罪のさんの得意な歌を歌う。

この様に考へて行くと、十代の若者に関する事はまだ／＼沢山あります。何故この人々はこんな態度を取るのでしようか。それは私の考えでは、ある目的に対する意度を取るのではなく、意志を持って熱心に一步／＼進んで行く努力をしないからである。その点私達蹴球部員は蹴球という絶好のそのを持つてゐるのだから、それに若い力の爆発をぶつければ、すばらしいものが出来上ると思う。私は蹴球に何を求めていけるかをよく考へなければならぬ。十代に与えられた特権、それは若さだ。そして若い今、有意義に過す事は人生を有意義に生きる事だ。

# スランプ。

十期 大石 一之



スランプ、実際ボクがスランプの状態に落ち入ったかどうか、それはボクにもハッキリとは判らない。とにかく調子が悪かった。気分がおかしかつた。自分のやつていることに全然自信が持てなかつた。

カーペイやることができなかつた。気分が悪かつた。自分にどうぞチケハグだつた。そしてちようどこの時に勉強の時でも調子の悪い時が来てテストごとに失敗した。こんな事からボクは大いに悩んだ。悩みに悩んだ。しかし結論は中々出てこなかつた。考へに考へた。しかし容易に解決の門は開いてくれなかつた。そしてある練習の今後も大きな研究の課題ではあるが、とにかく練習のシューーテインスの時はいく分かは蹴れたが、試合となるとまるつきりだめだつた。止めて蹴れと言わされたのでそしたら、トラックで失敗し、ドリブルからのキックなどは思いもよ

らなかつた。トラップせずにキックしろと言われたのをきうしたら試合中に必要とすトトラップしてもかまわないのに直接受けた。何事も、蹴つたりして失敗した。何事も、チケハグだつた。そしてちようどこの時に勉強の時でも調子の悪い時が来てテストごとに失敗した。この失敗からボクは大いに悩んだ。しかし結論は中々出てこなかつた。考へに考へた。それにはアイトがうすれてきたからだ。もとのボクとくらべて今のボクは物事をうまくやろうとか要領よくやってやろうとかゆう事に走つてしまつた。アイトを忘れていた。そしてボクは決意したものとのボクになろうと。そして又ある結論を得た。スランプは実行とファイトにより乗り越えることができるものだと。



前回も考え悩みぬいたナイスキック、それを今ボクがやつたのだ。この感激は忘れられない。そしてボクはその時から自分で判つてきた。なぜ調子が悪くなってきたか。

# DANH

を  
想  
す

七期 奥田斐規

ます”おめでとう”と書こう。

くはない——「ダッシュ・シユ・創刊以来四年目、お七号おめでとうのつもりなのだが

三年前の今日（正月七日）、お伴ながらも全国大会に参加して、そこで忘れられない正月休暇を過した大阪から帰つて来て、ほっと

落ち着いた時、僕は寒い、自分の部屋で将に途方に暮れていた。頭の中を“ダンシュ”、“ダンシュ”が駆け廻っている。寂しい机の上に散らばっているほんの二、三部の原稿が僕をあざ笑うかの様に目の前をちらつく。耳もとでは、この部読発行の発案者である先輩、加藤さんの「レッカリ頼むよ」との声がささやくどころかうなつている。苦心慘憺、田苦ハ苦、三拜九拜してとにかくこれが限度と思われるだけの原稿を集めた。編集に關しての知識等まるつきり持ち合せていない編集長——めぐらのタルマさんにゴーリキーハーをやらせた様なもので、手も足も出ず、唯そこにあるのみ、およそ頼りにならぬ。が、その反面「知らぬが仮」という奴で、「これだけ原

稿が集まれば、五六十頁にはなるだろう。もうオ一号は出来たも同然、これを印刷屋へ持ち込めば、立派な創刊号の誕生しと思つていたのだから大したもの。

印刷屋へ紹介してもらおうと、  
部誌に關しては先輩格の山岳部で  
話を聞いてびっくり——僕の今まで  
でやつたことといつたらほんの  
富士山に登らんとする者が御殿場  
線列車に乗り込んだ位だという。

集めた原稿を全部読んで、それを十五字二十行の特別な原稿用紙に清書、清書の清書も時には必要だった。その字数を計算して、一冊の本を自分で製作し、各原稿を字数に応じてあてはめてゆく。空所には適当に押入絵、カット、はての本をそここの空所に納まるだけ又自分でそこの空所に納まるだけ

の専用の原稿を急造したり、題字をらおうと思つてゐるのでもない。の取り方で都合をつけたり、等々、當時の事を考へると、原稿の最初集めた原稿だけでは僅かに三十頁そこくにしかならない。という事が解るまでには、そう手間を取らなかつた。だがそれからが大変、今さら原稿を頼むといつても新人戦はあるし、一ヶ月後には学期末試験があるといつて……。それから仕方なく、今まで例の試験前といえども、そう心やすくはしなかつた「徹夜」というものに二、三日おつき合い。何でもかまわず頭に浮んだ事を書きなぐり、割りふり用の手製の本を四、五冊作り……やつとこすつとこ……恩えれば恩えれば、難産……そして生れた子は、大變な栄養失調と……。

こんな事、得意になつて書いているのでもなければ、同情してもうる。でもその時思わず顔を赤くするのは僕だけのことだと思つ。「ハイ、奥田さん、タツシユ書かれているようにしてもう一つ、原稿の見たなさ（これは何も美しい字を要求しているのではない）。ただもう少し各自が丁寧に書いたらどうか」ということだ。」この二点が良くなれば編集の仕事を随分楽になるだろうと思つて後々の編集委員のためを思い、又「タツシユ」は現役、OBを問はずみんなで作るみんなの部誌である、という事が忘れられないためにも、ヒンヒン思つて恥をさらしたまでだ。

さて、四年目を迎えた「タツシユ」が「栄光サッカー部」と共に増々発展していく事を祈りながら、一番最初の一巻初めらしからぬ編集長の感言も終りとしよう。

年に数回、自分の机とか本棚等を片づける等、ふと「タツシユ」の古いのをパラパラとめくつて見るのではなくて、僕だけのする事ではないだ

# GOSSP

○ある日、KJの清水君が黒いバッ

クスキンのシャンなスペイクを買  
つてまいりました。これを見た一  
人。

「あ、このスペイク裏返しじや」

又一人曰く

「あ、これスミ塗たんだろ、スカ  
シテラ……」

そして曰く

「ね、バックスキンで何? 倭英語

頗りんだ。」

○月があんまり青いので、彼は思

はずこんな事をつぶやきました。  
KJの中には純情な人が沢山います。

「ネ、お月様って人の顔のよう

見えない。僕にほほえんでいい

みたい。」

断わつておきますが、彼はレッキ  
としたサッカー部員です。

○合宿で

「オイ、お前へをしたろ」

「えーーうんしたよ。だけどい已  
「サツキ・トランプの時」

うよ。」

「じゃ僕じゃない」

「……」

○統時計に生きる。

練習中、大泉・大前兩君はその

熱心さの余り腕に負傷をしてしま  
いました。そしてその夜病院の帰  
り道、夜目にも鮮かに二人の手を  
つるした白布が光つておりました

。ト大前君曰く

「あ、急行まであと三分だ。急

○サボルのも……

今の頃には仲々猛者が多いので有名。その一人曰く、

「練習をきほるのもサッカーの禁しみの一つなんだよ。」

○雨にも負けず、风にも……

インター杯もあと一週間と半分に迫ったある雨の日、寒い／＼と

部屋の中で凜えていた一人が声をあげた。

「アッグレン」

かの紅の近藤君、二の雨の降りしきる中、只一人敢然とボールを蹴つてします。あッにはかに体操を始めました。そしてキツツ。彼の

一擧一投足を部室は、かたずを呑んで見ていまし。と一人がいいました。



○ある日部室で

市村君がえな事を云いました。

「俺今日よ、四枚靴下はいくた

と、林君例の如く例のように

「ヘーツよく集めたじゃん」

○中前君の自己紹介

「僕の名前は中前タカシでゴンチ

ではありません。コンジというの

はあだ名で決して本名ではなく、

これは、大泉さんに大いに責任が

あるのです。三ヶ月前まで僕の本

名をゴンチと思っていたのです。」

○湘南戦、岩淵氏ドナル事しきり

「そんなファウルに負けるんじや

ない！」

## 第一話 守ちゃんの疾

スに轟んだ試合でありました。一

点の先行を許した栄光の後半から

の猛追は実に鋭く、ハーフラインに壁がつくられたかの觀がありま

した。そしてその猛追が実を結んで、サイドハーフからのロビング

を山賀沢がハツシとばかりヘツデ

インクでたたき込んだ時の感激は

実にすばらしいもので全員の嬉しそうな顔々……。そして又、実

に轟んだのが守ちゃん。

「オレ感激しちやつて……。」

ボロリ、ボロリと玉のような感激の涙がしたたり落ちたそうです。

「ああいう奴がいる内は蹴球部色

イントーハイド

第二話

足をつらして退場の止むなきに至つた大石君、悲壮なる声でチキショウ、チキシヨウを連発していくが、さて負傷いえ、出場の時、「オーケー、審判、入ったぜ。」

今年の蹴球部のほとんどの試合を応援に行らして下さつた大木先生、七月のある日

「先生、中学の県大会十二日です。」  
○大木先生  
「オレ三十円貰つて五十円出した先生、中学生になりりますか。」

今年の蹴球部のほとんどの試合を応援に行らして下さつた大木先生、七月のある日

「オレ三十円貰つて五十円出したよ。」  
すると富野君曰く  
「へー、じや九十円のとくだね。」

第三話

試合前、小田高の試合を見守していた栄光の面々云う事しきり。それをいやつという程嘲かされた小田高の娘、いさか頭に来たが

○ある日の事でした、テレビに映つた美智子妃を見た松田君、「ワーアー、美智子さんすばらしいな、ワーアー」

ビそれを見た佐藤君  
「日本ファイト・ダッショウ、ダッショウモウだ持つてけ、持つてけ、シユモウだ持つてけ、持つてけ、ああ、やっぱリ俺達が出なヤダメダナー。」

○天下泰平

日韓サッカーの時の事をした。

第四話

決勝戦後、アルオエラ方が「表彰式を行ひますので集まつて下さい。」

○ある日の事でした、テレ

「日本ファイト・ダッショウ、ダッショウモウだ持つてけ、持つてけ、シユモウだ持つてけ、持つてけ、ああ、やっぱリ俺達が出なヤダメダナー。」

大石君、答えて曰く

「もうものはもらつとけ」



○アディオス

スペイン語で「今晚は」とは「ベノスチアス」「きょうなら」とは「アディオス」と云う。得意になつてサッカー部員連中、土曜日の帰り道、修道院の人に向つて皆「ベノスチアス、アディオス」修「ベノスチアス、アディオス、アスタマニアーナ」何だ? A「アツ、アスタマニアーナつて C「へー、俺達は日曜日来ないから、アサツテマニアーナかい?」

B「アシタまでつうんだよ」 C「へー、俺達は日曜日来ないから、アサツテマニアーナかい?」

○「文部省選定」「少年を守る会特選」の歌をさつかり声で歌つていたKIIのA君を指してC2の越智君曰く、「Aさか思春期なんだね。」

○「マリーアントワネット」

○「いや、美智子さんが一番だ!」

○「キレイだとか違うとかは、大いに主觀が作用するぜ!」

○山小屋にて

山小屋のある日、一九五九年の最後の日、炉ばたで、KIIのイレブンが話し合つています。宗教論から政治論から、果ては美人論まで雁び出しました。

「ネー、今迄で誰が一体美人だろう。」

「クレオペトラとフビジンと...」

「マリーアントワネット!」

「いや、美智子さんが一番だ!」

すると一人が

「キレイだとか違うとかは、大いに主觀が作用するぜ!」

結局話の結末は十年後の今月今夜お互にこの山小屋へ連れて来て、誰の主觀がすばらしか競うことになりました。その時のイレブンは二六、七才ですね。

皆「あばよ」

」

# 昭和 34 年度 戦績

= 高 校 =      = 中 学 校 =

高 級	地区 別 リーグ 戰	34.5.3	茅ヶ崎	5-0	○
		5.9	吉 田 嵩	4-2	○
		5.23	藤 織	4-0	○
		5.30	湘 南	2-1	○
關 東 大 会	予 選 1	6.21	關 東	3-2	○
	準 決	6.27	小 田 原	0-5	●
	三 決	6.28	慶 志	0-1	●
親 善 試 合		7.26	暁 星	1-0	○
團 体 予 選	2	8.11	關 東	2-2	■クジ
練 習 試 合		9.24	防 大	3-0	○
		9.24	防 大	2-2	△
イ ン タ ー 杯	予 選 1	11.3	關 東	3-1	○
	2	11.8	川 嶋	9-0	○
	3	11.15	湘 南	4-1	○
	準 決	11.21	小 田 原	3-1	○
	決	11.22	鎌 學	0-5	●
親 善 試 合		35.1.17	綠ヶ丘	5-0	○
新 人 戰	2	2.14	鎌 學	1-3	●
18 戰	12 勝	5 故	1 引 分	勝率	6割 6分 6厘

中等

## 練習試合

4

5. 16

片瀬

1-0 ○

湘南三校リーグ 6. 22

藤沢一 0-1 ●

〃

6. 22

片瀬

0-3 ●

〃

6. 28

横須賀学院

9-0 ○

県下中学選手権 1. 7. 12

市場

1-2 ●

## 練習試合

10. 24

横須賀学院

6-0 ○

〃

11. 28

藤沢一

1-1 △

県下中学選手権 1. 12. 25

千代

0-0 ■△↑

8戦

3勝 4敗

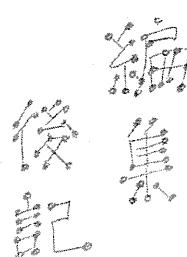
1引分

3割7分5厘

セフンのDASH作製に当った我専編集員は全くアンラッキーでした。というのは、例によつて例の如く、原稿の出が非常に、極めて言語に絶する程悪かつたからです。皆さん、来る来る栄光サッカーチームの諸君、君たちは、

セフンとラッキーでしょ。それに引き換え、六号まで出来てゐる物を七号までに延ばすだけの私達の容易な仕事、なんという怠慢でしよう。我等は、これでも結構したつもりでいるんですから

筆セフン、ラッキー



無くては淋しくていられないでしょう。そこを考えた上で次号には諸君の美文を張り切つて投稿して下さい。今号の事はもうとやかくいいません。皆さんも文句はひかえ目に。

奥田さんの原稿を読んでいくうちに、涙が出て来ました。みんなに苦労なさって作り上げた創刊号の私達の容易な仕事、なんという怠慢でしよう。我等は、これでも結構したつもりでいるんですから。今号が余りに拙劣極まり無いものになつてしまつたので、次号の掲載ばかり湧いて来る。次号こそがどんな淋しいものか皆さんがアツと驚いてアゴがはずれるようなものを作りますから、来年二回の小冊子でも待つていて下さい。中前峻

# 新役員

## 決まる

新役員選挙は一月一四日三十二人出席のもとに、午後三時一五分より、高一〇の教室に於て挙行された。尚、不在投票が一一票あつた。選挙管理委員は三四年度、主将同じく副主将の石原、田畠兩氏であつた、結局、市村、林、清水の諸氏が主将、副主将、会計と決定主将選出、副主将選出43票。

○ 市村 36	林 18	市村 1
○ 林 4	太田 13	町田 1
○ 太田 3	佐藤 7	宮杉 1
43 票	大石 2	清水 1
会計選出 32 票		
○ 清水 18		
○ 佐藤 14		

# EIKO. SOCCER

「ダッシュ」一九七号

昭和三十五年三月十八日印刷  
昭和三十五年三月三十一日発行

発行所

株式会社 横浜市金沢区六浦町四八三

編集責任者 中前 峻

社番

印刷所

光 有

丁目 (ア)

非 壱 吕

編集長 中前 峻

社番

美術担当 大石 一之

編集員 唯野 英輝